

interview

サマージャズに寄せて 「ありがとう日比谷公会堂！」

北村英治 森 寿男 今田 勝



●サマージャズは今年で47年。長いですね…。

北村 47年もずーといらっしゃるお客さんがいるわけだから、ありがたいよね。

今田 30年ぐらいまでは、来ていた方に手を挙げてもらっていた(笑)。

●お客様もモダンな方が多いですね。

今田 はじまりはピットインからだった。色々あったよ。大成功したのだけど、苦労がたくさんあった。1回目も2回目も。失敗したわけではないけど…。

森 47年もやっているミュージシャンも亡くなっている方が多いですからね。

北村 今ちゃんもよく頑張ってますよね。

今田 いやいや、英ちゃんもよくやってますよ。

北村 僕なんてただ吹いているだけだよ(笑)。

●この時期はフェスの出演が多いのでは？

北村 最近はかなり絞ってる。夏は楽器の温度管理が大変。野外も多いし、雨降ったりしたら、さらに大変。

●北村さんは、たくさんの方と共演されたりしてますよね。

北村 同窓会みたいな感じだよ。サマージャズは。鈴木章治は「こういうフェスティバルは苦手だから出たくない」と言っていたけど。藤家(虹二)はでたがった(笑)。僕はこういうお祭り騒ぎは大好きだけどね。

●日比谷公会堂は階段がたくさんあって、お客様も大変ですね。

北村 老人ホームに入っている友人がサマージャズによく来てくれて「いつも楽しみにしてる」って。毎年舞台から客席に居るのが見える。

森 エスカレーターをつければよいのにね。

●今度(2016年春から)改築したら、色々ハイテクになってくるでしょうけど。意外と都心でやっているサマージャズって少ないですね。

今田 最初のほうは野外だったからね。ゴザもってきて酒飲みながら聴いていたからね。

北村 外でやるのがサマージャズって感じだったもんね。



●ビッグバンドは、ニューハードもシャープ&フラッツも出ていましたよね。ビッグバンド全盛期ですね！

森 当初ブルーコーツはでてなかったけど、僕の代になってからだよ。色々とでられるようになったのは。

●今田さんはわりとトリオで出演されていました？

今田 昔はトリオでもやって、他のグループからも手伝ってほしいと言われて駆け込みみたいな感じで、リハなしで一緒にやっていた。

北村 みんな今ちゃんとやりたいって集まってくるんだよね。今ちゃんは人がいいから、みんなとやってあげる。大変だけどそれをこなすんだよ(笑)。

●昔、今田さんのヘアーはアフロでしたよね(笑)。めちゃめちゃファンキーで！

今田 そんなときもあったね(笑)。ロックやフュージョン、フリージャズとか流行りだしたころは、色々なバンドで弾いていたよ。若い連中(ミュージシャン)は中々チャンスがないんだよ。いつも決まったことしかできない。だいたいジャズ喫茶が主催だったから、いつも出る人は決まっちゃってるからね。

北村 時代に合わせていたんだよ。

今田 靴だって、かかとの高いヤツ履いてた(笑)。この歳になってこんな履けないけど(笑)。そうそう、渡辺香津美が中学生のときかな、中牟礼貞則さんの紹介でピットインに来て、お母さんがアンプと楽器を持って「先生お願いします！」って。初めてそこでスタンダードの曲をやりだしたんだよ。若いから僕の履いていた靴をあげたんだよ(笑)。

北村 そう考えてみるとさ、あーという間だよ。今ちゃんとは昔バンドを組んで一緒にやっていたもんね。

今田 英ちゃんも新しいことやろうとしていたのかもしれないけど、モダンな連中を集めてね、凄いのをやっていたんだよ。

●えー！北村さんがモダンですか！なんてたって、「スウィング英治」と呼ばれている北村さんが、昔は「モダン英治」でもあったなんて驚きでした。

北村 ある時に切り替わった。モダンをやらない、コピーもやらないって決めた。というのもバディ・デフランコに「俺の真似をするな」って言われた(笑)。「プロだったら俺の真似しないで、スタイルがスウィングでもいいじゃないか。自分のスタイルというか英治が吹いてるっていう吹き方をしろ」って。それでコピーをやめたのだけど、そしたらとんにバディから仕事が出てさ。二人でやろうって。オーストラリアでもバディと一緒にツアーした。ありがたいよね。

●海外との交流っていいですね。

北村 いまも頑固にオーソドックスなスタイルで少しモダンな感じだけどね。だから森さんのブルーコーツと一緒にやってもうまくマッチする。サウンドがとても合うのだと思う。

森 そのころはまだ僕は40代。

北村 吹いてたころだもんね？トランペットを。

●えー、そうですか。トランペット奏者だったのですか？芸大のときから？

森 高校の時にラジオとかでブルーコーツやゲイスターズとかを聴いていたわけ。バンドタイムとかあったじゃないですか。あのときに「スターダスト」とか演奏していて、品のいいブルーコーツに魅了されて、ここに入るには芸大に入ったほうがいい、と思って芸大に入ったわけ。それが一番近い道だと思って。

北村 ちゃーちゃんがやってたんだよ。

森 そうそう、小島(正雄)さんがトランペットを辞めて(リーダーになって)、その後僕がトランペットで入った。それでなんとかやってこれたわけだけど。

北村 前身には長尾(正士)さんがいて。

森 ブルーコーツは今年で70周年と言っているけど、実際は先代を入れたら80周年ぐらいになるわけなんだよね。グレン・ミラーと同時期にできたわけだから。



第1回サマージャズ パンフレット



北村 オーケストラは限られていたからね。ブルーコーツ、シャープなど。日本のビッグバンドって色んなスタイルをやらないといけない。あれが大変だと思う。

森 前に北ちゃんが「スウィングを守るよ」と言ってくれて、一貫してスウィングしている。

北村 クラリネットってスウィングに合うんだよね。どんなオーケストラにも合う。

森 昔、日野皓正はスウィングが好きでブルーコーツとよくやっていたときがあったけど、いまはその路線(モダン)になってから、もうこっちに戻りづらくなったよね。あれで有名になったしね。

北村 ブルーコーツってレパートリーが多いよね。というのもスウィングといったらグレン・ミラー、ベイシー、エリントンもみんなやらないとね。それは大変だと思うよ。

森 ブルーコーツはあっちこっち行く先で、グレン・ミラーをやってくれてリクエストをもらう。

北村 毎年オーチャードホールにニュー・グレン・ミラー(現グレン・ミラー・オーケストラ)が来てるじゃない。必ず行って聴かせてもらっている。リーダーのニック・ヒルシャーや若い連中が見事なんだよ。アンサンブルがビックリするほど素晴らしい。

今田 昔の譜面を使ってるの？

北村 うん、昔の譜面。アンサンブルも忠実に再現してるね。サウンドも良い。初めて聴いたのが、パディ・デフランコで69年に来たとき。「ムーンライト・セレナーデ」は(テンポが)70以下だったね。リードのクラリネットと2ndテナーサクスがオクターブで決まってるじゃない、それがビブラートを合わせてる。涙でるほどいいんだよ。見事だなーって。で、最近のグレン・ミラーと69年に聴いたときとテンポが一緒に驚いたね。これはちゃんとレーニングしないと息がもたない。

今田 へー。

森 スウィングは、グレン・ミラー、ベイシー、エリントン、これだけだね。時代だったんだね。



北村 小さいバンドでよいのは沢山あったけどね。ピリー・ヴォーンとはとても綺麗にやっていたね。ピリーだけは色々なものを取り入れてやってたよね。ゲストで入れてもらって、結構やった。代表曲の「ムーンライト・ベイ」なんてやる前は、なんて安っぽい曲なんだって思っていたけど、実際中に入ってやってみるとんでもない！やっぱり名前のでるバンドって凄いんだなって思ったね。共演といえば、スタン・ゲッツが紹介してくれたウディ・ハーマンや、ジョー・ウィリアムズ、ハンク・ジョーンズなどと一緒にやれたのは良い経験だったし、自慢になるよね。日本のミュージシャンの中で一番運が良いところを歩いてきたと思う。

今田 僕も海外だとグローバー・ワシントンJr.と一緒にレコーディングしたりしたけど色々勉強になったね。リズムが凄いなと思った。一拍だけでも違う。

北村 アメリカは無名だけどソロがめちゃくちゃうまいって人が多い。楽器をやっている数が多いというのもあるよね。日本との大きな違いとはリーダーの音楽をやる。みんな納得してみんなやってくれる。そういうところはいいよね。レイ・ブラウンとやったときは、その場の音楽をやる、伝統を重んじるって感じだった。

森 ミュージシャンって個性が強いでしょ。何にも言わず好きなことをやらせる。そうすると120%を出してくれる。海外でもステージに出てくるときに、にこって笑ってくれると母親みたいに嬉しくなるよね。楽しくやってほしい。個性も重要。

今田 しかし、サマージャズもよく続きますね。

北村 ほんと。これも、まあ、日本ポピュラー音楽協会が一生懸命頑張っているおかげだね。それだけを楽しみにしているお客



さんが沢山いるし。日比谷をベースにして、あの急な階段をあがっていくのも楽しみの一つだと思う。

●日比谷公会堂は改築工事をするので、今年度末で一旦クローズになります。建物が北村さんと同い年なんですよ。

北村 そうなんだよ。昭和4年なんだよね。僕と同い年。だから当然メンテナンスしないといけない。僕の身体もそうだから(笑)。

今田 僕があそこが一番早く出演しているんじゃないかな。なにしろ学校の庭が日比谷公園だったから。日比谷小学校だった。あそこにプールもあったよ(笑)。明治大学に入って、ジャズのバンドがなくて、仕方なかったからマンドリンクラブに入った。終戦直後に日比谷公会堂に出ていたね。

森 僕は芸大に入って、昭和26年に初めて日比谷公会堂に出た。芸大のプラスバンドで。

今田 じゃあ同じ時代だね。僕が大学に入ったのが昭和23年だから。英ちゃんのような先輩を観てすごいなーって思った。



第2回サマージャズ パンフレット 第2回サマージャズ パンフレット中面

北村 僕は慶應ライトに所属してたじゃない。ライトができたとき、直ぐに入れてもらって、最初はコンポで使ってもらえて大変勉強になった。京橋のコンチネンタルにコンポに出ていた。それから南部(三郎)さんに出会った。

今田 南部さんはよくスタジオで会いましたね。いつもゴルフの話ばかり(笑)。スタジオは作曲やアレンジの勉強になったなあ。しかし、当時のジャズ屋さんは譜面なしでもなんでもやっちゃうから、色々使われたね(笑)。重宝された。あとキャンプで演奏したとき譜面をずいぶんもらってきたよ。

北村 かならずもらってきたね。

今田 キャンプ行くたびに勉強になった。譜面がしっかり書かれていたから。コードの勉強になったよね。あれは凄かった。まだ家にありますよ。

森 当時はとても貴重だったね。いい時代だね。

北村 一番いい時代を生きてきたなって思う。今の若い人たちに引き継いでいきたいな。



戦後70年、JAZZと共に人生を歩んできた北村英治さん(東京・渋谷区生まれ 86歳)、今田 勝さん(東京・北区生まれ 83歳)、森 寿男さん(東京・江東区生まれ 83歳)にそれぞれの想いを語っていただきました。語っていらっしゃる時の、その爽やかな笑顔に人生のふくよかさや品格を感じました。皆さんがトークの最後に同じことを言われていました。「JAZZが好きでたまらない。JAZZが人生の全て」だと。

あの日比谷公会堂の急で長い階段には86年間の数えきれないほどのミュージシャンと観客の足跡が刻まれています。日本のサマージャズは47年前にこの日比谷で産声をあげ、JAZZの歴史を刻んでまいりました。この歴史的建造物のような会場で感謝の意を込めて、たくさんの奇才たちが立ち、想い出の詰まったステージで今年もサマージャズが開幕します。

インタビュー:佐藤美枝子 写真協力:カクoon パンフレット提供:今田 勝
許可なく転載・引用することを堅くお断りします。
全文は当協会HPをご覧ください。